

南九州における中世仏神像彫刻の研究

有木, 芳隆

<https://hdl.handle.net/2324/7363910>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (文学), 論文博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名	有木 芳隆			
論 文 名	南九州における中世仏神像彫刻の研究			
論文調査委員	主 査	九州大学	教 授	井手 誠之輔
	副 査	九州大学	准教授	伊藤 拓真
	副 査	九州大学基幹教育院	准教授	石井 祐子
	副 査	清泉女子大学	教 授	佐々木 守俊

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、熊本県(旧肥後国)、宮崎県(旧日向国)、鹿児島県(旧薩摩・大隅国)に重なる南九州における中世の主要な仏像および神像彫刻を対象とし、彫刻史から地域史、信仰史にいたる多様な観点を駆使することで、日本彫刻史と南九州の中世地域社会の双方に正しく位置付ける試みとなっている。

第 1 章と第 2 章では、南九州 4 ヶ国との境界地域にあたる熊本県球磨郡における仏像造立の特質を論じ、とりわけ毘沙門天像など平安期の神将形像が他地域に比べて特異なほどに多い点に注目し、発願者である在地領主たちの領域守護と、より上級権力による南辺境界を守護するという二重の願意が込められていた可能性を論じている。また平安から鎌倉時代に造立された在銘仏像の比較検討から仏師系譜の異同を比定している。

第 3 章では、13 世紀の肥後で活動した寒巖義尹周辺の造仏をとりあげ、十一面観音菩薩像、釈迦如来像から発見された複数の納入品と銘記を検討し、造立の背景と外護者との関係、義尹の中国宋仏教への傾倒と強い舍利信仰を指摘し、義尹周辺の造像は、中国宋からの新しい造形が移入された鎌倉時代の彫刻史や仏教史における顕著な事例として意義づける。

第 4 章では、肥後中央地域の室町時代の仏像を論じ、当時の文書史料からは知られない肥後国内の争乱の状況と仏師たちの動向、大寺院の中での僧たちの関係などを仏像の在銘史料から明らかにしている。

第 5 章では、鹿児島の中世仏像として、とりわけ隼人塚石造四天王像を中心に各地に残る複数の石造毘沙門天像など 12 世紀の石造神将形像を検討し、これらが太閤正八幡宮の影響下に造立され、正八幡宮に石造仏工房が存在した可能性を指摘し、神将形像の図像や石材の多用などに、大陸の影響が存する可能性を示している。

第 6 章では、阿蘇・高千穂や霧島など南九州の山岳神祇信仰に基づいて造立された神像彫刻について考察し、10 世紀頃から南九州でも神像彫刻が造られ、実作例でも史料上の記述からも 12 世紀に神像が急増する背景に一国一宮制の成立による中央政府の地方神祇への関与を指摘している。

以上の考察によって、本論文は、南九州の主要な中世仏神像彫刻の製作背景、製作年代、仏師の技術的系譜などを明らかにするだけでなく、中世南九州彫刻の造形的特質をさまざまに引き出すことに成功している。一国一宮制の成立と関係する 12 世紀の神像や入宋した寒巖義尹周辺の造像では、畿内や大陸の規範に即時に対応する造形が実践される一方、太宰府での受容を経由し、また仏師の移動・移入などを前提とする造像では、規範に対するタイムラグや地域色のつよい造像があること、また南九州特有の地理的・歴史的条件下で、球磨における毘沙門天造像には地域守護と辺境守護という二重の願意があること、鹿児島では太閤正八幡宮の自立の動きと連動するような石造仏造立の独自の展開があったことなど、南九州に特有の造像の事例が抽出され、その背景もが解明さ

れている。多様と特殊とを共に地域的特色として検証する本論文は、著者の長年にわたる地道な調査活動と研究意欲に支えられたもので敬意を表したい。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）を授与されるのに十分な能力を持つことを認める。